

●春日部市民文化講座（第 6 回） 「千利休のわび茶 ～その 1 ー利休の弟子たちー」

◆日時：2013 年 6 月 12 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時



■カリス（聖杯）を見ていた千利休

今日はとんでもない物を持って参りました。皆さんが好きな物で、侘び茶の原点はこれだという物です。これねえ、「カリス」(写真左端の器)って言うんですよ。この「カリス」っていうのは、カトリックのミサで使われる聖杯です。これはローマの聖パウロ修道会で作ったものなのですが、何でも、何でこんなものを持ってきたかという、千利休はこんな物に囲まれていたのではないかと思うのです。千利休は、堺にあってキリシタンの人々が、こういうカリスでミサを捧げる光景を見ていて、回し飲みをする原点を見ていた筈なのですね。

■利休の茶のエネルギーは堺から

その頃、堺には会合衆という人たちが 40 人くらい居たのですが、その会合衆の人たちのほとんどが武野紹鷗あたりから茶の湯を学んでいるのです。彼らはただ集まって商売や政治をするだけではなく、お茶を飲み一緒に食べて、お酒も入った集まりをしていたのです。堺のエリート集団の会合衆には、文人としての高尚なお付き合いの場があって、サロンのような場があったのです。そこでは常識的に茶の湯というものが行われていたみたいです。僕が今まで調べてきた「わび茶」のそもそものはどこから始まったかという、堺から始まっただろうということが出来ます。堺辺りがエネルギーとなって、僕たちが知っている「利休の茶」、三千家が奨励している「茶の湯」のそもそものが堺に絞られていくのです。その証拠がイエズス会の宣教師のジョアン・ロドリゲス(1561-1633 年、ポルトガル人宣教師)という人が膨大な「日本教会史」という本に書いています。これは、ルイス・フロイス(1532-1597、ポルトガル人宣教師)よりも確かな文章です。今日は「堺」を中心に話をしたいと思います。

■千利休の一番弟子は長次郎

利休には弟子はいたのですが、利休の茶碗を焼いた長次郎を弟子と呼ぶ人はいないのです。でも、僕が調べていくと、長次郎が一番、千利休のわび茶を理解した人だと思うのです。理解しなかったら、こんな茶碗でできなかっただろうと思ったのです。千利休と長次郎がどこで出会ったかを知っていますか？ ぼくは堺で出会ったと推測しているのです。「下克上の文化がわび茶」なんですよ。小さい茶室で、みんな仲間だぜ、みんな人間だぜ、悲しみも痛みもみんな一緒だぜ、だからここでは武士も何もないだろう・・・と。だから利休さんは刀掛けを作ったりして、誰でもが入れるようにして、お茶会で楽しく過ごすには、身分など捨てなかったら本当の楽しみはないぜ・・・という仕掛けを作ったのが利休さんのわび茶なのです。そのわび茶を見事に使う物として、道具として表現したのが長次郎です。わび茶の世界でまず出てくるのが長次郎です。その長次郎さんの子孫は樂吉左衛門さんです。15 代の樂さんのお話を伺った時、「長次郎の茶碗の不思議は、無作為の美と説明する人がいるが、私には理解できない。なぜなら、人間とは作為するものではないか。長次郎茶碗を無作為の意というよりも現実のものと結びつける作為がそこにあったと考えられないか」と言われました。15 代の樂さんは子どもの頃に、あの方の家にある長次郎が造った鬼瓦などを跨いだりして遊んでいたそうです。長次郎さんというのは瓦職人なのですから、15 代の樂さんが「これはただの瓦職人ではできないよ。これはりっぱな造形家でセンスのある人だ」と言っているのです。

■わび茶は唐物を否定する事！

長次郎の茶碗ができて、これに相応しい茶室というと天正 10 年以降にできたものなのです。天正 10 年になぜできたかという、織田信長が殺されたのがその時で、信長の時代が終わって、秀吉が山崎の戦いで明智光秀に勝利し、その戦勝記念として天王山に二畳台目の茶室「待庵」を建てたのが、この年です。この「待庵」は「あなたをお待ち申し上げます・・・」と言われるのですが、これも怪しいのです。でも、信長が殺されてから「利休の茶」というのがフワァ〜と広がっていったのです。堺でたぶん利休さんが瓦職人の長次郎と知り合って、利休さんの片腕ができて、利休さんの「わび茶」がどんどんどんどん広がっていく・・・というのは、「わび茶」は何かというと、それまでの「唐物」を否定する事なのですよ。否定するって駄目だということではなく、こっちがいいねっていうことなのですよ。黄金の茶室も彼の設計です。彼の指示でできました。金を出したのは秀吉ですが、これを作ったのは千利休なのです・・・ということは、千利休の黄金から土塊(つちくれ)までのこの幅を知らなければ、「わび」についてのことはまだまだ僕を含めて分かっていないということなのです。

■わび茶の創生

何回も言いますが下克上なのですよ。価値観が変わってしまったのです。それまで金閣寺や銀閣寺なんかで、室町時代の人たちがいいねえ・・・と言っていた唐物が、いや違うでしょう竹の花入であり、竹の茶杓でしょうって言い出したのです。でも、これも説明がつかないのです。三千家、誰も家元は言っていない。ただ、僕が直接聞いて



た中では、武者小路千家の今のお家元が「キリシタンの介入がなかったら、侘び茶は語れない」と。これって凄いことだと思いません。三千家の一つのお家元ですよ。要するに「わび茶の創生」において、キリスト教との関わりを無視したら、私たち自身の存在が成り立たなくなるということまで言っているのですよ。じゃあ、これ世に出そうよ・・と言うと証拠かないんです。何故ですか、それは完全に切り取られてしまっているのです。ただ点がぽんと出ています。それは先ほどの「やまんば文庫」(写真)なのです。でも、江戸時代になると、中期までの間に完全の「わび茶の創生」とキリスト教の関係が完全に払拭されています。だから私たちが知っている古田織部像は本来の古田織部とは違うと思います。

古田織部というのはもしかすると高山右近に負けないくらいのキリシタンであった可能性がある。それは、銘「破れ袋」(写真:五島美術館より)という水指が今二つ残っているのですよ。いつ水が漏れてもいいような割れそうな水指なのです。でも、それがいいじゃないかと言ったのが古田織部なのです。でも何故かイエズス会の文様である釘とか十字架の文様を織部好みのお茶碗として作っていくのです。



■古田織部が仕掛けたもの…！

古田織部は「へうげもの」と言われて、突飛な、いわゆる流れに乗らない、利休さんの「わび茶」をさらに歪めてしまったというイメージがありますが、実はそうではないと思うのです。小西行長の領地の一つとして瀬戸内海の「室津(むろつ)」(地図、左上赤い記)。そこは、堺に入る前のあらゆる物が集まって来ていました。秀吉の九州征伐の時、小西行長が戦のための武器や兵士のための食料を全部集めて、そこから送る差配をしているのですよ。バ

テレン追放令が出た時に、室津にみんなが集まっているのです。集まった人の中には、オルガンティーノ(イタリア人宣教師)という当時のリーダーと高山右近と、諸々のキリシタンの中に古田織部がいたはずなのです。そして古田織部が仕掛けたすごい仕掛けは、利休のわび茶の庭に蹲踞とキリシタン燈籠(織部燈籠と呼ばれています)をセットにしたことです。ですが、この説明を付けられる人は誰もいません。これがもし本当に作為的な、しかもキリシタンの弾圧から逃れるための仕掛けであり、我々はここでキリシタンのミサをしていますよという暗黙のサインであったとしたら、古田織部ってどういう人だったのでしょうか。凄い人でしょう。

■温もりを一番欲していた利休さん

今、僕が感心をもっているのは土器です。これは 4500 年前の土器で、それに増村紀一郎先生に漆を掛けていただいたものです。その時、増村先生は「面白い」と一言。何が面白いかというと、4500 年前の土器を造った人の手の跡がくっきりと付いているのですよ。そして、「その 4500 年前の人の温もりを感じた」と言われたのです。そして僕に「温もり」という銘がいいと提案され、僕が箱書きしました。僕は千利休のわび茶というのは、戦国時代だったから、下克上の時代だったからこそ、今までと違った文化、価値観をみんなが求めていたし、なによりも一番、利休さんが「温もり」を求めていた人だったと思うのです。茶の湯とは、人と人との関わりです。僕は、茶会を催すときに一番大切なのは道具ではなくて、そこに集まって来られる一人一人こそが大切だと、僕がキリストから学んでいる心です。一人一人が自分自身を愛するように、他の人に対するコンパッション(深い思いやり)を持っていなかったら生きてはいけません。そういうことを千利休は、自分が考案したわび茶の中に、いっぱい秘めていたと思います。そういうことを千利休一人でしたかという、そうではなく長次郎という理解者がいて、楽茶碗を焼いたのです。さらに茶室を四畳半から詰めていくときには捨てることの名人の右近がいたのですよ。そして二畳の茶室を造り、一畳半までいったのです。だから利休さん一人が総てを作ったのではない。作庭においてもいろいろな武将がいて、古田織部の存在というのは謎であるが故に利休さんとは深い関わりがあったのではないかと思えてならないのです。『江岑夏書』に古田織部を能無しで下手くそだとわざわざ書いているのですね、これも不思議ですよ。

■大切な器に、自分自身を大切に！

こうしたお茶碗も家元の権威ではなく、作者の「温もり」を感じられるようになったら面白いですね。僕たちも価値のある土器になりましょう。大切にされる器になりましょう。そのためには自分自身を大切にしないといけないのです。僕はそれが「わび茶」じゃないかと思うのですよ。

この回では、茶碗や長次郎のことを勉強しました。新しい見方ができ勉強になりました。